

# 方丈記の先蹤文学の一資料

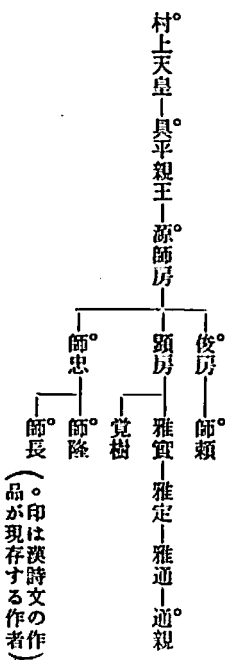
— 成實堂本文大体系源通親久我草堂記 —

川 口 久 雄

故徳富蘇峯翁旧藏鎌倉期古鈔本文大体系のことは山岸教授によつてはやく紹介されたが、その巻首に擬香山模草堂記があり、何人の作か不明、白氏文集卷七、香鑪峰下新置草堂即事、詠懷題於石上に擬したかといわれていただけで、柳智院本作文大、体覆製本開題その内容は知られていなかったが、私は成實堂の日本漢文関係蔵書閲覧の途中調査させていただいたのでその本文について紹介をかねて報告したいと思う。

卷子本古写一軸、墨界ある長巻で、紙背に文永八年不斷念仏結番交名や寺家消息の書かれる料紙。作文大体系も源順の新撰詩髓腦などを含み貴重なものであるが、そのことは近刊の小著で紹介した。本記の成立は高倉天皇崩後、「生涯近三四旬、官班沈三八座、兼三武職二ねた人物の作。源師房の後でこの条件に当るものを物色すると源通親を得る。彼は寿永三年〔一一八四〕に三十六才、参議左中将で、成立もこの前後で平家が壇浦で滅亡したのはこの一年後である。通親は土御門

内大臣として新古今集に六首、和漢兼作集に一首の作のみえる歌人であるが、同時に詩人で兼作集に二聯、  
風薫南嶺二三月 鶯啼上陽六十春 卷二、春中、花院老人家  
籬菊紫殘秋色冷 井梧紅脆雨声餘 卷八、秋下、山寺即事。  
の作が見える。



その先祖には後中書王をはじめ王朝漢詩文の名家が多く、これに今昔物語集にゆかりある覚樹や、大鏡作者に擬せられる源房や雅定というような人物がいることは注意せられる。

この記のなかみは先ず城南久我<sup>こが</sup>桂離宮南方の上久の地に師房が長元六年〔一〇三三〕草堂を営んで久我と命名してから、天皇・上皇が行幸されたことをのべる。中右記寛治元年〔一〇八七〕の条に、

二月十日、天晴、上皇遊<sup>あそ</sup>寛鳥羽辺宅、并右大臣古河水閣。

六月二十九日、斎宮遷<sup>うつ</sup>御右大臣久我水閣。

などに見える、白河上皇が鳥羽離宮に御幸するついでに顕房の草堂を訪れたもうたのである。次に山南池北に僧庵を建て先祖の墓を営み、三昧僧をおき普賢悔過や弥陀例時を営むよしをのべ、九年前父雅通が薨<sup>き</sup>じて以来ここを通親が伝領して、四季逍遙の興に、身の憂えや時變のはげしさを忘れるよしをのべ、四十歳ちかいが官位沈滞<sup>しんてい</sup>しているまま、この地を白桑天の草堂記にみえる廬山に比し、寺を遺愛寺になぞらえる。翌年白氏のそれに模した草堂を新たに築いて、四年前に崩じた風月の主であつた高倉天皇宸筆の阿字を壁にかけ、白桑天の真影を安置して、園城寺の釈俊公を饗し、東西兩曹の好文の才子たちを招いて新成草堂の賀会を催したいきさつをのべ、七律一篇をしるして結ぶ。

さてこの記に見える一つの特徴は白氏崇拜であつて、「白桑天之傳」というものを読んで彼が文曲星の化身だということに感動する。この書は「白太保傳」というものと同書らし

く、すでに本朝麗藻に高階積善の詩の分注に「太保者是文曲星神」とある。通親は文曲星を媒体として、白居易の変身として「風月の旧主」であつた先帝を同一視しかねないような神秘的な傾斜をもつて、桑天の影供をしているようである。草堂の規模や調度は正しく白氏文集卷四十三の草堂記に模し、草庵生活そのものもかの廬山草庵生活に模している。この文章が白氏の草堂記を模していることは偶然でない。試みに首尾のみを比較してみる。

(白氏草堂記)

匡廬奇秀、甲天下。山北峯曰香鑪峯、北寺曰遺愛寺。始居新堂、四月九日与河南元集等凡二十有一人、具齋施茶菓以落之、因爲草堂記。

(通親草堂記)

城南幽奇、甲雍州地。北峯曰香鑪峯、北寺曰遺愛寺。於新堂招河南元集、四月九日也。就新居招城北好才、四月晦日也。時令相同、祭奠始之略近、因統草堂記。

その内容の神秘性といい、この文章の模倣的な性格といい、王朝漢文学の伝統がまさしく解体し終末するすがたをさながらに伝えるもの。創作精神のたぎりたちもなく、雕蟲篆刻のきびしさもなく、模倣にもたれて主體的なものを見失いそうである。しかし「不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>權貴者不<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>時變。不<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>家富者不<sup>レ</sup>染<sup>レ</sup>生計。只貪<sup>レ</sup>家書、空事<sup>レ</sup>産業。生涯近<sup>レ</sup>四句、官班沈<sup>レ</sup>八座。兼<sup>レ</sup>武職、有<sup>レ</sup>何益。黃紙漏<sup>レ</sup>恩、失<sup>レ</sup>文王<sup>レ</sup>愁猶生。紅淚未<sup>レ</sup>乾、就<sup>レ</sup>斯地<sup>レ</sup>休<sup>レ</sup>其愛。狎<sup>レ</sup>民間<sup>レ</sup>蠅<sup>レ</sup>主事」というあたり、治承・寿永のはげしい動乱の社会を背景にして、もはや律令的な秩序

が意味を失うにいたって、政治の現実より遁走して水辺の草堂に独善自適のみちを見出そうとする古代終末期のインテリゲンチヤの苦悩をまざまざとうつし出す。

このように山居隠逸をあこがれ、草庵生活に自己を解放しようとするのは貞平親王以来の源氏系文人の流れともいえるのであるが、同時代人で和歌の世界でこのような草庵漂泊の生活および文学を形成したのは西行である。

白氏草堂記や池上篇のように、間適精神をもらいあげ、草堂池亭に悠々自然にひたる生活を叙べるところの様式は、漢文学の上における一つのパターンであって、道真の書斎記・兼明や保胤の池亭記はどれもこれに属するものである。通親の草堂記も正しくこのパターンに属する作品であって、これより二十八年後に、通親より四歳わかい長明によって和漢混濁文で作られた方丈記もまさしくこのような池亭記もしくは草堂記の様式をうけるものであって、方丈記はこれまで保胤の池亭記に拠って作られたと説かれてきたが、加藤繁・野村八良博士・山田孝雄博士ら二百数十年前に作られた池亭記よりも、わずか二十八年前の通親の草堂記がある意味においてよけい影響しているともいえる。例えば四季の景物の条、

(白氏草堂記)

春有錦繡谷花、  
夏有石門洞雲、  
秋有虎窟月、  
冬有幽峰雪。

(保胤池亭記)

春有東序之柳、細煙嫋嫋。  
夏有北戸之竹、清風颯然。  
秋有西窓之月、可以披書。  
冬有南簷之日、可以炙背。

(通親草堂記)

春賦杏園黃鸝、  
夏詠蘆州丹鳥、  
秋遊松江一箸、  
冬酌藍水三盞。

とある箇所を、方丈記の諸本と比較してみる、

(真名本方丈記)

(延徳本方丈記)

(大福寺本方丈記)

待<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>春<sup>ノ</sup>露<sup>ヲ</sup>留<sup>メ</sup>而<sup>テ</sup>春<sup>ノ</sup>は鶯<sup>ノ</sup>のこゑを待<sup>テ</sup>て春<sup>ノ</sup>ハフジナミヲミル、紫  
開<sup>ニ</sup>鶯<sup>ノ</sup>鳴<sup>ル</sup>。夏<sup>ノ</sup>は鶯<sup>ノ</sup>の鳴<sup>ル</sup>と聞<sup>ク</sup>。松<sup>ノ</sup>にか雲<sup>ノ</sup>ゴトクシテ西方ニ、  
松<sup>ノ</sup>懸<sup>ニ</sup>紫<sup>ノ</sup>雲<sup>ノ</sup>のよそほホフ。夏<sup>ノ</sup>ハ郭<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>ヲキク、  
粧<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>懷<sup>ニ</sup>歎<sup>ス</sup>。ひ<sup>ニ</sup>てな<sup>リ</sup>つかし。夏<sup>ノ</sup>は郭<sup>ノ</sup>カタラフゴトニシデノ山  
秋<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>限<sup>ニ</sup>月<sup>ノ</sup>影<sup>ノ</sup>満<sup>チ</sup>公<sup>ノ</sup>をき、かたらふことデヲチギル。アキハヒグ  
月<sup>ノ</sup>容<sup>ノ</sup>想<sup>ニ</sup>像<sup>ヲ</sup>。に四<sup>ノ</sup>手<sup>ノ</sup>の山路<sup>ヲ</sup>を契<sup>ル</sup>。ラシノコエミ、ニ満<sup>チ</sup>リ、  
冬<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>迷<sup>ニ</sup>紅葉<sup>ノ</sup>。秋<sup>ノ</sup>はくまなき月<sup>ノ</sup>の影<sup>ノ</sup>に満<sup>チ</sup>ウツセミノヨリカナシム  
不<sup>レ</sup>常<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>様<sup>ノ</sup>也。月<sup>ノ</sup>のかほばせをおもひやホトキコユ。冬<sup>ノ</sup>ハ雪<sup>ノ</sup>ヲア  
り、冬<sup>ノ</sup>のあらしに散<sup>リ</sup>まがハレブ、ツモリキユルサ  
ふ紅葉<sup>ヲ</sup>をば、常<sup>ニ</sup>ならぬ世<sup>ヲ</sup>マ、罪<sup>ノ</sup>障<sup>ニ</sup>ニタトヘツベ  
のためしなりと見<sup>ス</sup>シ。

のごとくであって、真名本や延徳本の春の鶯の発想は通親の草堂記をうけているかと思われる。方丈記は兼良筆本などでは「外山庵記」とよばれているが、方丈という発想は通親の、広袤三間に過ぎず、豊殺また方丈を以てす。

という文句に基づいて、長明の、

ヒロサハワヅカニ方丈、タカサハセ尺ガウチナリ。

という文章に展開したともみられよう。大福光寺本に対して真名本系の先後には問題があるが、ここに紹介した資料は何かこれらの問題についての参考資料となるであろう。

## 擬香山模草堂記

城南幽奇甲<sub>レ</sub>雍州地。河東村曰<sub>二</sub>鳥羽<sub>一</sub>。里境樓城、軒騎、往還尤煩、水石屈曲得便。其砌寂寥、且甲<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。長元六年夏、裴祖右丞相、一<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>卜<sub>レ</sub>之、再宿忘歸。新移<sub>二</sub>象岳之居<sub>一</sub>、以為<sub>二</sub>菟裘之地<sub>一</sub>。而河陂山、不日成<sub>レ</sub>風。手聚<sub>二</sub>拳石<sub>一</sub>、足決<sub>二</sub>斗水<sub>一</sub>。縮<sub>二</sub>陽榮<sub>一</sub>以納<sub>二</sub>秋月<sub>一</sub>、月、洞<sub>二</sub>陰戶<sub>一</sub>以米<sub>二</sub>涼颺<sub>一</sub>。作<sub>二</sub>為蝸舍<sub>一</sub>、雖非燕寢、高閣低廊、率稱<sub>二</sub>心力<sub>一</sub>。相府既米為主、稱<sub>二</sub>地号<sub>一</sub>於久我。主富<sub>二</sub>遐算<sub>一</sub>地保<sub>二</sub>長生<sub>一</sub>故也。遂得所好、終老受之。万乘主、或停<sub>二</sub>仙躋<sub>一</sub>、二代上皇、或<sub>二</sub>橫虛舟<sub>一</sub>、積善不<sub>レ</sub>空、三槐連枝、餘慶旁覃、五柳繼<sub>二</sub>塵<sub>一</sub>。山南建<sub>二</sub>金客<sub>一</sub>、紫磨之梵宇、池面北累祖三公之墳墓。傍構<sub>二</sub>數字之僧庵<sub>一</sub>、內置<sub>二</sub>三昧之禪侶<sub>一</sub>。素曉消<sub>二</sub>普賢罪籍<sub>一</sub>、黃昏唱<sub>二</sub>弥陀例時<sub>一</sub>。日日飭<sub>二</sub>瑜伽壇<sub>一</sub>、年々訪<sub>二</sub>彼菩提<sub>一</sub>。何必<sub>二</sub>硯亭碑麗<sub>一</sub>行客之淚、商洛祠貼<sub>二</sub>隱逸之栖<sub>一</sub>哉。僕傳<sub>二</sub>之八九年<sub>一</sub>、往來幾<sub>二</sub>千廻<sub>一</sub>。春賦<sub>二</sub>杏園黃鸝<sub>一</sub>、夏詠<sub>二</sub>蘆州丹鳥<sub>一</sub>。秋垂<sub>二</sub>松江一箸<sub>一</sub>。冬酌<sub>二</sub>藍水三漚<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>地中仙<sub>一</sub>。盍<sub>二</sub>送象外老<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>權貴者<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>時變<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>毫富<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>染<sub>二</sub>生計<sub>一</sub>。只<sub>二</sub>食家書<sub>一</sub>、空事<sub>二</sub>產業<sub>一</sub>。生涯近<sub>二</sub>四旬<sub>一</sub>、官班沈<sub>二</sub>八座<sub>一</sub>。兼<sub>二</sub>武職<sub>一</sub>有何<sub>二</sub>益<sub>一</sub>。黃紙漏<sub>二</sub>恩<sub>一</sub>、失<sub>二</sub>文王<sub>一</sub>。悲猶生。紅淚未<sub>レ</sub>乾、就<sub>二</sub>斯地<sub>一</sub>休<sub>二</sub>其憂<sub>一</sub>。押<sub>二</sub>民間<sub>一</sub>、<sub>（敬）</sub>王事。徐攀<sub>二</sub>山脚<sub>一</sub>、倩<sub>二</sub>顧地形<sub>一</sub>。遙隔<sub>二</sub>塵機<sub>一</sub>、粗似<sub>二</sub>匡廬山<sub>一</sub>。北峯、應<sub>二</sub>謂<sub>二</sub>香鑪峯<sub>一</sub>。北寺、應<sub>二</sub>謂<sub>二</sub>遺愛寺<sub>一</sub>。試披<sub>二</sub>草堂記<sub>一</sub>、忽模<sub>二</sub>竹塙樣<sub>一</sub>。広袤不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>三間<sub>一</sub>、豐殺又以<sub>二</sub>方丈<sub>一</sub>。桂柱非<sub>レ</sub>斷、石階以<sub>レ</sub>砌。湛<sub>二</sub>藍溪水<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>白蓮池<sub>一</sub>。々、中立<sub>二</sub>竹台<sub>一</sub>、々、南渡<sub>二</sub>松橋<sub>一</sub>。環<sub>二</sub>虛多<sub>一</sub>青田。春雨東作、秋風西收。夾<sub>二</sub>谷有<sub>二</sub>翠松<sub>一</sub>。高及<sub>二</sub>三十間<sub>一</sub>、陰連<sub>二</sub>五葉<sub>一</sub>。云昔先公柳<sub>二</sub>北白河之松枝<sub>一</sub>、加<sub>二</sub>南青巖之草創<sub>一</sub>。誓云家<sub>二</sub>門於此<sub>一</sub>、砌永繁榮者、根株傾<sub>二</sub>其蓋<sub>一</sub>、而可<sub>レ</sub>長矣。及<sub>二</sub>低柯不<sub>レ</sub>圖挺<sub>一</sub>、<sub>（敬）</sub>標、忽然茂<sub>二</sub>子葉<sub>一</sub>。早耀<sub>二</sub>椒腋之寵光<sub>一</sub>、帝梧恭出<sub>二</sub>運府之貴植<sub>一</sub>。戚里之寄、是重<sub>二</sub>將相之榮<sub>一</sub>、旁開<sub>二</sub>被甘棠者<sub>一</sub>、依

有邵伯之遺愛、州人敬之。此仙樹者、為存相府之盟約、亭子賞之。遂明年林鍾之末、草堂新成。白氏將案彰文星化、入夢。惕覺感靈威、肅潔供茶菓。小年讀白案天之傳、其身為文曲、星之化。今又憶夢中之子細、弥地掌上之丁寧、屈園城寺、釈俊公、凝寸丹聊敬白。作東西曹之新賓、擬琴詩酒之昔友。風情中動、星曜外顯。丹祈所請、玄心豈秘哉。然者高倉先朝者、風月旧主也。樂天有靈者、豈不歸文章。其文曲星者、元是東方之薩埵、今則北斗之列宿也。掌天上之政教、定人間之禍福。南面之寶位、如幻以過。西利之託生、必可導為旧臣。忽餘恩懇志之切、只仰哀慙。所期非他、二世拜覲也。所願非他、一仏之芳緣也。往事觸物無忘、旧賜宸章、空有字。其中捧神筆。阿字懸堂之南壁、修弥陀之講。肆祈安養之得果。思遠宗雷之遺弟、占隣宿修善。每月之四禪、不外尋。身縱歸黃壤、跡及于玄孫。生々世々、此勛莫懈。繡綺語以婦仏乗者、昔遺文也。豈无尚響哉。模香山案真影、今微志也。何無照鑒哉。凡厥梓樟竹簾、木榻藤杖、各搜器用、併納戶牖。予若冠之始、好文之時、早有留念。今遂本懷、終老於此地、成就於我志。池魚山鳥、聞此言。青嵐皓月、久相伴。於新堂招河南元集、四月九日也。就新居招城北好才、四月晦日也。時令相同、祭奠始之路近。因統草堂記。賀草堂新成詩、

白氏鑑峯傳普樣

斯栖元白属幽閑

池模蓮府古時水

月似虎谿秋夜山

翠蓋掩窓松百丈

草堂模跡竹三間

清泉白石知吾否

爰營土木日々攀

擬香山模草堂記

城南為奇甲，隴川地河東村。

日曷得里境樓城。

軒騎往還，元煩水石，席曲得便。其初，廉察旦甲。

天下歲元，六子，復景祖右垂相，一翁卜之，再病。

易改新彩，氣盡之，故以為荒寒之地。而河脈山。

不自感風，手聚拳右，足波斗水，宿陽榮，納秋月。

張氏以來，涼颶作焉，蛸舍雖北，燕夜高岡，任。

從歸黃壤跡及于玄孫生一世此勤莫懈能得  
改侍者昔貴文也堂元尚必我模香山景真影今  
敬志也何玄照壁外凡厥淳樸竹廬木榻藤杖石樓  
器用併納戶牖予蓋冠之始好文之時早有蓄念今  
遂奉懷終老於此地成就於我志池泉山鳥因此嘉爾  
睦月久相伴於新堂松河南元集正月九日也就新居拓城  
北好才宗月晦日之時令相同祭貢始之路近因讀書堂  
記賀草堂新成詩